

鎌田茂雄著「般若心経講話」講談社学術文庫 1986年9月10日刊を読む

1. 般若心経はどう読むべきか

それではこの「般若心経」はどのようにして読むべきか。目で読むのではなく、心で読むのが心経なのである。心で読むということは、文字にのみとらわれるのではなく、その生命かんたくを感じ得ることである。心経の生命を感じ得するにはどうしたらよいか。道元禅師は「経巻きょうかんといふは、全自己の経巻なり」(「正法眼蔵しょうぼうげんぞう 看かん 経巻」というが、経巻は自己そのものであることはもちろんであるが、その自己は汝に対立してある自己ではない。汝と対立する自己は真の自己ではない。仏教でいう真の自己は、私と汝がおいてある全自己にほかならない。別なことばでいえば、真の自己とは、汝と対立する自己ではなく、無我なる自己をいう。無我なる自己とは、何らの先入見もなく、鏡のように透明とうめいな自己をいう。この透明な自己になりきる時、心経はその真の意味をあらわしてくれるのである。

P16 ~ 17

2. 到彼岸の6つの方法

大乘仏教では「到彼岸」に6つの方法があるという。これを六波羅蜜はらみつとか六度という。この六波羅蜜は仏教倫理の根本をなすものである。六波羅蜜とは

- (1) 布施ふせ、
- (2) 持戒じかい、
- (3) 忍辱にんにく、
- (4) 精進しょうじん、
- (5) 禅定ぜんじょう、
- (6) 智慧ちえ

の6つをいう。

(1) 布施ふせというのは施ほどこすこと、恵むことである。布施には法施ほうせと財施ざいせがある。法施というのは教えを施すこと、財施というのは金や物を施すことをいう。

(2) 持戒じかいとは仏の戒めを守ることであり、悪行をしないことである。自己規律を守るといってもよい。どんな仕事をするにしても生活を正すことが根本である。生活が乱れるならば当然仕事も乱れる。この持戒ということは簡単にできるように見えるがそうではないのである。

(3) 忍辱にんにくというのはどんな困難にあっても耐え忍ぶことで、克己ひとことといってもよい。一言でいえば忍耐である。

(4) 精進^{しょうじん}は一生懸命に努力することである。これも容易なことではない。今日よりは明日へと不断の前進をすることである。自己を鍛えることだといってもよい。宮本武蔵のことばを借りるならば「朝鍛夕錬^{ちょうたんせきれん}」というところか。「朝鍛夕錬」して死ぬ者は幸福である。老いは朝鍛夕錬する意志をも奪うからだ。昔の禅者が自己の死期を悟り、座禅をしながら息を引きとるようなことはわれわれには不可能だ。われわれにできることといえば、壮年期までは何とか精進努力が可能だというくらいのことであろう。

(5) 禅定^{ぜんじょう}とは心を静かに統一させて散乱させないことで、集中力といってもよい。静坐して冥想^{めいそう}することによって、禅定力はやしなわれるのである。

(6) 智慧^{ちえ}とは前段で説明した「般若」のことでいわゆる普通にいう知識のことではない。

この6つの方法のなかでもっとも重要なのが「般若波羅蜜」である。初めの5つも、最後の般若波羅蜜があって初めて用をなすのであるから、般若波羅蜜こそ六波羅蜜の眼目というべきである。

P26 ~ 27

[コメント]

心静かに自分を取りもどす最もよい方法の一つが、般若心経を読むことであるとしている人は多い。御参考になるのが鎌田先生のお話。

- 2009年3月26日林明夫記 -